

「……っ、は♡あ、あっ♡」

ヴヴヴヴヴ…

ヴヴヴヴヴヴ…

「あ♡これ♡この強い♡これきもちっ♡クリがビリビリする…っ♡♡」

ヴヴヴヴヴ…

ヴヴヴヴヴヴ…

「っあ♡いくっ♡いく、…う♡♡いく…、」

——ピンポーン

(…ああ、どうしよ、なにか荷物来る予定あったっけ、
今から服着て玄関まで行って…それまで待っててくれる
かな)

「おーい、夢子ちゃん？」

「えっ！！お義父さん！？」

夢子は慌てて立ち上がり転がっていた服を掴んだ。

週の内の何日かは在宅勤務している夢子。

真っ昼間の誰もいない家で働いていると、性欲の強い夢子はいつも体の奥が疼いてきてオナニーを始めてしまっていた。

休憩、と称してソファで大腿を広げてクリバイブをあてて。一日に何度もしてしまうこともある。

夫の亮(りょう)との関係が悪いわけではない。

ただ、夢子の性欲が強いだけ。夫とのセックスの回数では物足らないだけ。

仕事で疲れているであろう夫を巻き込むこともなく自分で自分の欲の処理をしているのだから、夢子は仕事に支障が出ない範囲であればこうすることが正しいと思っていた。

「——すみません！お待たせしました！」

「いやいや、俺夢子ちゃんの連絡先知らないからさ、突然来る感じになって悪かったね」

玄関を開けるとさわやかな笑顔の養父が立っていた。

彼に会うといつも、夫はこの父親の影響を強く受けているんだろうなと思わされる。

夫も養父も背が高くジム通いが趣味なこともあって、体が大きくて分厚くてたくましいのだ。

自らの努力で鍛え上げた筋肉をどう見せるか、にこだわっているため着ている服もなんだかオシャレ。

養父の年齢は確か四十代後半だったはずだけれどそうは見えない若々しさがある。いわゆるイケオジと呼ばれる部類の男性だと思う。

「亮に荷物預けてたんだけど、今日だったら夢子ちゃんが家にいるから勝手に持っていっていいって言われてさ。仕事の途中で寄っちゃった」

「そうだったんですね、どうぞどうぞ」

夢子は玄関のドアを押さえ養父を招き入れた。

養父は仕事で外回りが多いらしく、ときどきお土産やらを持って訪ねてくることもあった。

でも、今日お義父さんが来るなんて亮は言ってなかつ

たけれど。夢子は首を傾げつつ、「まあ忘れることもあるか」とさっぱりその思考を切り落とす。

「お時間ありますか？せっかくですしお茶でも飲んでいきます？先週亮くんが出張のお土産で買ってきてくれたお菓子もありますし」

「お、いいの？ご馳走になろうかな」

「お茶入れますのでソファでゆっくりしててくださいね」

そう言ってカウンターキッチンへ向かう夢子。

しかしそこで気付いた。

ソファにはさっき使っていたバイブが置いてあるのだ。慌てて服を着て玄関へ向かったのでそのときにどこへ置いたか記憶がない。

まさかそのままソファに置きっぱなしなんてことは――

「……夢子ちゃん、え〜〜と、これ…」

「……………！！！」

ソファの元へ小走りで向かった夢子だったがもう遅かった。

気まずそうに立ったままの養父の手には、さっきまで使っていたバイブ。

「す！！すみません！！すみません…！！すぐ片付けます！！！」

顔を引き攣らせ慌てて養父の元へ駆け寄る。

急いでバイブを受け取ろうとすると、養父はその手を頭上へあげた。まるで夢子から取られまいとするみたいに。

「え…？」

背の高い養父にそうされてはもちろん夢子の手など届かない。

夢子は養父のその行動の意味が分からずぽかんとした顔でその顔を見上げた。

養父は笑っている。

「夢子ちゃん、いまオナニーしてたの？」

「……へ、？」

いつものさわやかさからは想像できない言葉が養父の口から出てきて夢子は耳を疑った。

「俺が来るまでオナニーしてた？もしかして邪魔しちゃったのかな」

「……………な、…え？」

また顔を引き攣らせ始めた夢子へ養父はゆっくりと近付いて。

大きな手が夢子の腰へ回された。

「俺が手伝ってあげようか？」

そして夢子の体を引き寄せ、ソファへ座らせる。

状況の飲み込めない夢子は養父に促されるままだ。

「こんなもの要らないよ」

そう言って養父は持っていたバイブをまたソファへ戻す。と、次は夢子のルームウェアのハーフパンツに手をかけた。

夢子の腰を少しだけ抱きあげてそれを引き抜く。ハーフパンツと一緒に下着まで持っていかれたことに気付いて夢子は始めて慌てた。

「え！？ちょっと待ってください！何して…」

「俺のせいでオナニー中断しちゃったんでしょ？悪かったなって思って。手伝わせてよ」

「い、いいです、何言ってるんですか」

「大丈夫、もちろん最後までしないよ、夢子ちゃんのクリトリスいじってあげるだけ。俺のこと勝手に動くおもちゃともでも思ってくればいいからさ」

「でも…！」

引き抜いたハーフパンツと下着はソファの下に落ちた。

養父は夢子をソファに寝かせるように優しく押し倒し夢子が抵抗する前に足を開かせる。

そしてそのまま体重をかけられると夢子は真っ昼間の明るいリビングで養父へ性器を見せつける格好になってしまった。

もちろん養父の力に敵うわけがない。それにどれだけ本気で抵抗していいのかも分からず夢子は恥ずかしさもあって動けなかった。

「やっぱりまだ濡れてるね、クリは…皮にかぶっててこのままだとよく見えないな」

夢子の濡れた割れ目をまじまじと確認してそう言った

養父の顔が、なんの躊躇もなく夢子のそこへ近付いて。

ぴと♡

と、皮に舌を当てた♡

本当にただ当てただけ。それでも夢子の足の指先がぴくりと動く♡

その当てられた柔らかい舌先が少しずつ硬度を増して
いってむずむずとくすぐったい♡

ゆっくりと舌で圧迫されていく♡

「……はっ、う」

オナニーが途中で終わっていたせいでクリトリスはすぐに感覚を取り戻していた♡

気持ちよくなりたくて舌の感覚に集中してしまうのだ♡

硬いままぴったりとクリトリスに張り付いた舌が♡

ゆっくりとクリトリスを舐め上げるように動く♡

舌の先まで行くと硬い舌先でクリトリスを押して♡

それがまたクリトリスを圧迫したまま舌の根元まで戻っていく♡

焦らすようにほんの少しずつ動くせいで舌のざらつき

までクリトリスで感じてしまう♡

舌の先端へ♡根元へ♡

養父は黙ったまま、ゆっくり、ゆっくり、舌を往復させている♡

「…っ、……っ、ん、…う♡」

触れられているのはクリトリスだけ♡

それも皮の上から♡

その鈍い感覚だけなのに、夢子の体は熱くなっていった♡

養父が来て取り上げられて燻っていた快感にまた火が点く♡

夢子がもじもじと体を動かしても養父はただひたすらにゆっくり、ゆっくりと舌でクリトリスを撫で続けた♡

ざらつく舌でクリトリスを舐め上げて、舌先で押して、それから包むみたいに根元に戻る♡

「…は、あ♡あ、ん♡」

(これじゃ…気持ちよくなれない)

夢子はわざとその舌から逃げるように腰をひねった♡

もっと違う刺激が欲しくなっている♡

養父は「自分のことをおもちゃだと思ってくれていい」と言ったが、それにしただけでこんな弱い刺激だけでは煽られるだけでとてもイけないのだ♡

一度夢子の腰が逃げたからなのか、養父の夢子の足を押さえこむ手に力が加わった♡

その微かな変化に夢子はドキとする♡自分がいま養父にゆるやかに拘束されていることを自覚してしまった♡

れる♡

次に養父の舌がクリトリスに触れたとき、さっきまでとは違う感触だった♡

尖らせた舌の先が皮の外側に触れて♡それから、

れる…♡♡れる♡れる…♡れー……っ♡♡

皮の周りを舐めるように動き出した♡♡

「……は、あっ♡♡」

それでもまだゆるい刺激だったがそれまでと違う刺激に一瞬体をのけぞらせてしまう♡

れる…♡れる♡

れる♡れる♡れる♡

くるとクリトリスの周りを回る舌♡♡

「はっ♡あ♡あ…♡」

クリトリスに血が巡っていくみたい♡

れる…♡れる♡れる♡

「あっ♡あ…♡あ♡」

ゆっくりと勃起しているのが分かる♡

れる…♡れる♡れる♡

「あ、う…♡んっ♡ん♡」

膨らんで大きくなって♡

れる♡れる…♡れ、れ♡れる♡

「ん…あッ♡あ、あ♡」

尖りきる頃には痛いくらいだった♡

れ…♡♡れ、れる♡♡れる♡

「ん…ッ♡ふ、う♡うっ♡」

養父の舌がまるで勃起促進するように皮の周りを舐め回して♡

それから勃起して皮から出ているはずのクリトリスの根元も丁寧に繊細な動きで舐めていく♡

「や、あ…♡あッ♡あ、あ♡♡」

夢子の口から甘ったるい声が漏れて腰が震え始めて♡
養父は一度クリトリスから舌を離すと♡

「こうやってゆーっくり勃起させてあげるとさ」

ぢゅう…！♡♡

「…………あゝッッ！！♡♡♡」

いきなりその勃起クリトリスを唇できつく吸い上げて
♡一瞬で解放した♡♡

「クリフェラのときの気持ちよさ違うでしょ♡」

楽しそうに笑った養父は、
跳ねるようにのけぞった夢子の下半身をまた押さえ込
んで♡♡

ぢゅっ♡♡ぢゅう……！♡♡♡

「やっあ…っ♡♡♡あ、あゝ…ッッ！♡♡」

さっきまでの甘やかすような愛撫はなんだったのか♡
♡

ぢゅ…ッッ！♡♡♡ぢゅううッッ♡♡♡

「あゝッ♡♡♡や、め♡♡♡アゝ ……っっ♡♡♡」

乱暴に吸い込んで♡すばませた唇で揉むように動かして♡

ぢゅうっ！♡♡♡ッッぽ♡♡♡♡♡♡

「んあゝッああッッ♡♡♡」

急に与えられた強い刺激に夢子は反射的に暴れてしまう♡

けれどそれも養父の腕に押さえられている♡拘束されているのだ♡

甘やかすように勃起させられたクリトリスを今度は乱暴に吸い上げられ解放されて♡♡

声を上げる夢子をよそに養父は本当におもちゃのように夢子のクリトリスを狙って責め続けている♡♡

ぢゅう……！♡♡♡……ッッぽ♡♡

ぢゅ…ッ♡♡♡…っぽ！♡♡

「あゝッあ、あ…！♡♡♡アゝ う♡♡♡」

ぢゅ、っぽ！♡♡ぢゅっ、…っぽ！♡♡

ぢゅうう……っぽ！♡♡♡

「ん、うゝッ♡♡ううゝ ～っ♡♡♡」

…ぢゅっぽ！♡♡ぢゅっぽ！♡♡ぢゅっぽ！♡♡ぢゅっぽ！♡♡♡

「や、あゝッ♡♡はげ、し♡♡だめ！だめ…♡♡♡」

ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！！♡♡♡
ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！！♡♡♡
「だめっ♡♡♡だめ♡♡♡待ってくだ、さ…ツツ♡♡
♡」

ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！！♡♡♡
ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！！♡♡♡

夢子の引き攣る体に気付いたのか、養父の唇は夢子を
追い詰める一定の動きのものに変わった♡♡

肩を押して引き剥がそうとする夢子の手を無視して夢
子のクリトリス目掛けてひたすら吸い付く♡♡

ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！！♡♡♡
ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！！♡♡♡
ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！！♡♡♡
ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！！♡♡♡

「やだ、…♡♡♡あゝ、あ♡♡♡それ、だめ、え♡♡
……イ、っちゃう♡♡イっちゃう、からあ！♡♡♡」

ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！！♡♡♡
ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！！♡♡♡
ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！！♡♡♡

ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！ぢゅっぽ！！♡♡♡

「あ、あ、あ、……♡♡♡……、……♡♡♡いくっ、いく……あっ、いく♡♡♡いく……ツツツ！！♡♡♡」

——がくん、
がく、がく、がく♡♡♡

養父が押さえ込んでいる腕を跳ね除けるように夢子の体がソファの上で大きく跳ねた♡♡

養父がすぐに口を離してもその体は何度も跳ねて、養父は自分が吸い上げていたすぐ下、夢子の入り口が収縮しているのを目で堪能している♡

「いいイきっぷりだね♡嬉しくなっちゃうなあ♡」

そしてそう溜め息まじりに言うと、まだ体を小さくヒクつかせる夢子のクリトリスを養父はまた唇で包んでしまった♡

ゆるく開いた唇に包まれているせいで口内の粘膜がぴったりとクリトリスとその周りの皮に張り付いて♡

「…！？」

イってすぐの敏感になっているクリトリスに触れられて夢子は信じられないというような表情で顔を上げた♡

けれど養父はその口内でまだ勃起したままのクリトリスを舌で根元から先端に向かって舐め上げ始める♡

「ひ、あゝ…！♡♡♡」

イったばかりの敏感な粒を今度は唾液をたっぷり含ませた舌で♡

口内の粘膜で吸い上げられその先を撫でている♡

ちゅ♡れる♡ちゅう♡れる、れる…♡

ちゅ…っ♡♡れる♡れる♡

「はっ、は♡あゝ♡もう、やめて♡♡」

言葉でお願いしても養父の手が緩むことはない♡

夢子も分かっている諦めたように背中も腕も投げ出すと、養父は夢子が観念したことを見計らってそれまで夢子の足を押さえていた手を移動させた♡

吸っていたクリトリスから唇を離し少しだけ被っていた皮へ指を添える♡

その皮を左右に広げ♡クリトリスを剥き出しにさせて♡

「……ひ、」

夢子が次に来るであろう衝撃に身構えると♡

ぢゅ…っ♡♡♡

剥き出しのクリトリスを根元から加えこみ♡♡

ぢゅ〜〜〜〜っっ♡♡っぽ！！♡♡♡

またきつく吸い上げてから勢いをつけて解放した♡♡

「あゝ ……………ツツツ！！♡♡♡うゝ ツツ♡♡♡」

イったばかりで敏感になっている、しかも生のクリトリスをそうされた夢子は今度は腰を浮かせてのけぞった♡♡

ぢゅ〜〜…………っっぽ！！♡♡

ぢゅ、っっっぽ！！♡♡♡ぢゅっ、っっぽ！！♡♡

「いゝ♡♡♡やゝ、あゝ♡♡♡それ、……♡♡♡やめ、て♡♡♡」

ぢゅっぽ！！♡♡ぢゅっぽ！！♡♡ぢゅっぽ！！ぢゅっぽ！！

「また♡♡♡それ♡♡♡だめっ♡♡♡」

ぢゅっぽ！！♡♡ぢゅっぽ！！♡♡ぢゅっぽ！！ぢゅっぽ！！

「だめ、あゝ ツ♡♡あゝ ～～～ツツツ♡♡♡あゝ ツ♡♡アゝ、あツツ♡♡♡」

ぢゅっぽ！！♡♡ぢゅっぽ！！♡♡ぢゅっぽ！！ぢゅっぽ！！

「…今度はこっちもしてあげようか♡」

「あゝ …、…………あ、あっ♡♡♡」

ぐち♡

養父の指が夢子のぐちょぐちょに濡れていたおまんこの割れ目を撫でて♡♡

指を充分に濡らしてから二本の指がゆっくりと入ってきた♡♡

「夢子ちゃんのおまんこ、すごい濡れてるね♡クリフェラそんなに気持ちよかった？♡」

「は……、っ♡♡」

「あったかくてぬるぬるのおまんこすごく気持ちいいよ

♡指締めてくれて♡ここ、ゆっくりいいこいいこ♡してあげね♡」

「…っ♡♡は、あ…っ♡♡」

クリトリスに唇を当てたまま♡

養父は挿入した指をゆっくりおまんこの上側にあてて撫で始めた♡

しっかり濡れているせいで痛みは全くない♡それどころか濡れているのに指の感触をはっきりと感じてしまう♡

入って少し先の上側、天井の部分を少しだけ押しながら指の腹が撫でている♡くるくるとあやすように♡♡

「…っ♡♡……、っ♡♡」

「もしかしてこれ気持ちいい？もう夢子ちゃんのおまんこの気持ちいいとこ見つけちゃった♡♡」

オナニーのときにあまり自分で挿入することのない夢子は知らなかった♡♡

ちんぽでははっきりと感じないそこを指で撫でられると初めての感覚がある♡♡

押し上げられたそこからじわ♡じわ♡と温かい気持ち良さが体内へ侵食していく♡♡

「ここいいこいいこ♡しながらクリトリス気持ちよくなるうね♡」

「は、あ…っ♡♡そんな♡♡」

ぢゅっぽ♡♡

ぐち♡ぐち♡

またクリトリスへのフェラチオを再開される♡♡

片手で皮を根元でしっかり固定され、生クリトリスを
咥えられ吸われて♡♡

もう片方の手はおまんこの天井をゆっくりといいこい
いこ♡と撫でている♡♡

「くっ♡♡んっ♡♡ん…ッ♡♡」

ぢゅぽ♡ぢゅぽ♡

ぐち♡ぐち♡

ぢゅぽっ♡ぢゅぽっ♡♡

ぐち♡ぐち♡♡

「ん`…ッ♡♡ん、う`っ♡♡」

ぢゅぽぢゅぽぢゅぽっ♡♡♡

ぐちぐちぐち…っ♡♡♡

また養父は夢子を責めることに夢中になって♡♡

夢子はいつの間にか自ら大きく足を開いてそれを受け
入っていた♡♡

ぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽ♡♡

ぐちぐちぐちぐち♡♡

「あ`うっ♡♡あっあ`ッ♡♡♡あ、ア`っ♡♡♡」

敏感な粒を吸われると下半身がビリビリと震えるのに
♡♡

おまんこの天井を撫でられるとじんわりと温かい快感
が広がる♡♡

そのギャップで体がバラバラになりそうになる♡♡♡

「あ、あ♡♡なにこれ、え♡♡♡気持ちいい…♡♡」

素直に口にした夢子に気をよくしたのか、養父は夢子
に口を付けたまま体を起こすと♡♡

そのまま夢子のお尻を浮かせるように折り曲げた♡♡

そうされるとおまんこの中は狭くなり、指をさらに締め
付けてしまう♡♡

そして養父の責めはまた強くなった♡♡

ぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽ…！！♡♡♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐち…！！♡♡♡

「あッあッ あっ♡♡♡あ、あッ♡♡♡あっ♡♡♡あッ
♡♡♡あッ あッ♡♡♡」

クリトリスを吸っていた唇は小刻みになって♡♡

おまんこの天井を撫でている指もそこへ食い込むよう
に強くなって♡♡♡

ぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽ…！！♡♡♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐち…！！♡♡♡

「あっ♡♡♡だめっ♡♡またきもち、いっ♡♡♡これす
ごいっ♡♡♡」

「気持ちいいの？夢子ちゃん♡♡」

「気持ち、いいです♡♡♡クリもおまんこも♡♡♡一緒
にされるの♡♡♡すごい…っ♡♡♡」

「かわいい…♡♡♡そんなとろとろになってくれて♡♡
♡またイかせてあげるからね♡♡夢子ちゃんのおまんこ
とクリいっぱい気持ちよくしてあげる♡♡♡」

ぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽ！！
♡♡♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐち！！♡♡♡

息を荒くした養父がまた♡

夢子のクリトリスとおまんこを責め立てて♡♡

「っっあゝ！あ、う♡♡♡ん” うっ♡♡♡イきたい♡♡
♡また♡♡イきたい、……っっ♡♡♡んっ♡♡あゝッ、
いくっい、く…！♡♡♡

夢子は筋が浮くほど大きく足を開いて喉をそらせ♡♡
♡

ぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽ！！
♡♡♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐち！！♡♡♡

「あゝ ～～～～……っっっ♡♡♡いくっ♡♡♡いく、
………ツツツ！！♡♡♡ん” ……ツツツ！！♡♡

♡」

伸ばした足の指がぎゅっと丸まって♡♡

夢子は体をソファへ沈ませるように揺らし絶頂した♡
♡♡

「……かわいい♡♡そんなに気持ちよくなってくれるなんて♡♡夢子ちゃんのクリいつまでも吸ってられそう♡♡」

養父はそう言いながら愛おしそうに夢子の腰や太ももを撫でている♡

その手にすらときどきぴくっと反応してしまう♡♡夫とは違う、歳を重ねた硬い手のひらが気持ちいい♡

そして、夢子は息を整えながら自分の体の深いところから湧き上がる欲と闘っていた。

(…正直、もうおちんぽ欲しい。でもこんなこと絶対言っちゃだめだ。そんなことしたら終わる)

黙って心の中で自分と格闘していたのに。

「夢子ちゃんのおまんこ、指抜いてもすっごいヒクついてるね♡♡おちんぽ欲しいんでしょ♡♡」

養父がそう見透かしたように言って、けれど何故かその顔はリビングの扉のほうへ向けられた。

その仕草に不思議に思った夢子も思わずそちらへ顔を向ける。

そして養父が言った言葉に体が凍りついた。

「亮～？夢子ちゃんちんぽ欲しいってさ」

「え？」

すぐにリビングの扉が開いて、入ってきたのは夫の亮だ。

スーツ姿の亮がこちらへ歩いてくる。

「…え、亮？なんで」

「夢子すっごい声出してたな、俺とのときはもっと静かなのにさあ」

バッグをソファの脇に置いて、亮は夢子の足元まで進

んできた。

夢子は混乱したまま目をぱちぱちと瞬かせている。

養父はその夢子の上半身側へ移動して夢子の背中を抱くように座った。

「細かいことはとりあえず考えなくていいから♡夢子ちゃんは気持ちよくなるうか♡」

「ちんぽ欲しいんだって？父さんにイかされてまんこ疼いてんだろ♡てか夢子あんなにイけるんだ、なんか悔しいわ」

夢子自身いつも一回イけば終わってしまうのに二度も連続でイけるなんて思わなかった、とは、すぐに言い返せなかった。

取り出した亮のちんぽが見たことないほど膨らんでいたから。

「ナカに欲しいんだろ？もう挿れていいよな♡」

「……っ♡」

ぬっ♡

ぬちっ♡

「ほんと、まんこぐずぐずじゃん♡こんなエロく仕上がってる夢子のまんこ初めて見た♡」

ちんぽの先を夢子の割れ目に往復させて♡

それから埋め込むようにゆっくりとその割れ目に沈ませた♡

「……っん♡は、あ♡」

今まで感じたことのない大きさの夫のちんぽが自分を中を押し広げて入ってくる♡♡

夢子は大きく息を吐いて、後ろの養父の胸に背中を押し付けた♡♡

（なに、この状況…、私なんで自分の旦那とお義父さんに挟まれてちんぽ入れられてんの…）

状況はいまいち分からない。

けれど二人の様子を見るに、何か口裏を合わせていたんだろう。

だからきっと養父に触られたことも自分に非はない。気持ちよくなってしまったことも。

「動くぞ♡」

ぬ♡♡ちゅっ♡♡

太いちんぽが浅いところから深いところまでを貫いて
きて夢子の背中がぞわぞわと栗立つ♡♡

(もう気持ちよくなっていいよね…♡♡)

夢子はナカのちんぽを感じられるよう、ぎゅっと下腹部に力を込めた♡♡

「あ～～♡まんこ気持ちいい♡夢子のまんこすっごい気持ちいいよ♡」

そしてすぐに動き始める腰に、夢子は体を縮こまらせる♡♡

ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡

「っん♡♡はっ♡♡あっ、あ♡」

「どう？夢子ちゃんのおまんこほぐれてる？」

「ほぐれてる♡とろとろでちんぽに張り付いて…♡」

まだ浅いところを短く往復するちんぽ♡

それだけでも夢子は指とは違うちんぽの感触に震えた♡

指のような細かい動きではなくても全体を圧迫されながら擦られる感覚がたまらない♡

ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡

「う、んっ♡あっ♡…んっ♡」

養父にさんざん気持ちよくされてイかされて♡

欲しいと思ったタイミングでおまんこにちんぽを入れられて♡

体が満たされていく♡素直に気持ちよくなってしまう♡

けれどこれは普通のセックスではなかった♡

「夢子ちゃん、ここもしてあげようね♡」

「え、……………あゝッ！♡♡♡」

ふいに背後の養父の手が胸に伸びてきて、服の上から乳首を手のひらで擦られた♡♡

その瞬間夢子の背中が反射的に丸まる♡

服の上からとはいえ、手のひらで擦られて乳首に火がついたように熱くなる♡それからすぐに痛いくらい勃ってしまっている♡

「えっちな夢子ちゃんは乳首も好き？♡オナニーのときはどうしてるの？」

すり♡すり♡

大きな手のひらが胸全体を撫でまわし♡

乳首に引っかかってくるくる♡と倒されて♡♡

「ひっ♡あ♡あ、うっ♡♡」

上半身がびりびりする♡♡

気持ちよくて体が勝手に動いてしまう♡♡

その間も亮の腰は止まることなく浅いところを往復していた♡♡

ぬちゅっ♡♡ぬちゅっ♡♡ぬちゅっ♡♡

すり…♡♡すりすり♡♡すり♡♡

「乳首されるとまんこうねる…♡夢子、父さんに乳首いじられて俺にちんぽ入れられて…気持ちいいんだ？♡」

「あ…、…♡」

そう言われると意識してしまう♡

いつも夫とするセックスとは違う、二人の男に体を触られているのだ♡♡

「いつものセックスじゃできないことしようか♡夢子クリ好きだろ♡一緒にいじってやろうな♡」

ぬ`、ちゅ…！♡♡

夢子の腰を浮かせるように、亮は腰を斜め下から深く突き上げて♡

「う`っ♡♡ん`♡♡」

いきなり与えられた深い快感に悶える夢子の、丸見え

になったクリトリスを親指で押し潰した♡♡

ぐりっ♡♡ぐりっ♡♡♡

「あゝッあああ…ッ♡♡♡」

ぐりっ♡♡ぐりぐり♡♡ぐりっ♡♡

ぬゝちゅ、ぬゝちゅっ♡♡ぬゝちゅっ♡♡ぬちゅっ♡

♡

「あゝ…っ！♡♡うッ♡♡あゝ、あゝッ♡♡♡」

おまんこの奥深くをちんぽで突かれクリトリスを強い力で圧迫されて♡♡

その上ガクガクと揺れる体もお構いなしに養父が今度は胸を鷲掴んで指で乳首を挟む♡♡

人差し指と中指で挟まれた乳首はそのまま左右にこりこり♡と揺らされた♡♡

「うあゝ…ッ♡♡♡あ、あゝあッ♡♡」

体の中に与えられる快感と、クリトリスと乳首に与えられる鋭利な快感で夢子の体は二人の間でガクガクと震える♡♡

足は宙を蹴ってその指は丸まって♡

そうして下半身に力がこもるとすぐにイってしまいそうだった♡♡

ぐりっ♡♡ぐりっ♡♡ぐりっぐりぐりぐり♡♡

ぬちゅっ♡♡ぬゝちゅっぬゝちゅっ♡♡ぬちゅぬちゅっ♡♡

こりこりこり♡♡こりこり♡♡こりこりこり♡♡

「気持ちいいよ、夢子♡♡」

亮がうっとりとした表情で夢子のお腹や腰を撫でる♡
♡

ナカに埋められているちんぽが更に膨らんだ気がして
♡夢子の心臓もぎゅっ♡となって♡♡

「わ、わたしも♡♡きもち…っ♡いい♡♡」

ぬ” ちゅぬ” ちゅぬ” ちゅぬ” ちゅぬ” ちゅぬ” ちゅ
…！！♡♡♡

夢子の素直な言葉に亮のピストンが早くなった♡♡
肌と肌がぶつかる音がして、クリトリスを押し潰しこ
ねくり回す親指にも力の加減がなくなる♡♡

それから背後から聞こえる養父の息も興奮したように
荒くなっていた♡♡

ぬ” ちゅぬ” ちゅぬ” ちゅぬ” ちゅぬ” ちゅぬ” ちゅ
！！♡♡♡

ぐりぐりぐりぐり…っ♡♡♡ぐりぐりぐりぐり♡♡♡
こりこりこり♡♡ぎゅっ♡♡ぎゅっ♡♡こりこりこり
こり♡♡♡

「あゝ、んゝ ツツ♡♡♡あゝ っ、あゝ あゝ ツツ♡♡♡は
げ、しっ♡♡♡あ、あツツ♡♡♡あゝ っ♡♡♡あゝ ツ♡
♡♡アゝ ツツ♡♡♡」

夢子の体が固まってしまったように引き攣って♡
亮は齒を食いしばりラストスパートと言わんばかりに
力任せに腰を振りたくった♡♡

ぬゝ ちゅぬゝ ちゅぬゝ ちゅぬゝ ちゅぬゝ ちゅぬゝ ちゅ
！！♡♡♡

ぬゝ ちゅぬゝ ちゅぬゝ ちゅぬゝ ちゅぬゝ ちゅぬゝ ちゅ
！！♡♡♡

「あ……ツツツ♡♡♡いくっ♡♡♡……ツツツ♡♡♡い、く
…う…………ツツツ！！♡♡♡あゝ ……………ツツツ！！！！♡
♡♡」

「あー…出るっ」

ばちゅ…ツツツ！！！！♡♡♡

亮が腰を突き上げきって♡♡

二人はガクッガクッと何度か体を揺らした♡♡

そして夢子は支えてくれている養父へ崩れ、亮はその夢子へ崩れて、二人とも肩で大きく息をする♡

養父は絶頂した二人を見て満足げだったが、夢子に触る手はそのままだった♡

優しく胸を撫で回し、ときどき勃ったままの乳首を引っ掛けていく♡

「二人とも若いんだからまだイけるだろ♡夢子ちゃんの気持ちよくなってるところもっと見たいなあ♡」

乳首を引っ掛けられるたびにぴくっと反応する夢子を養父は愛おしそうに見下ろしていた♡

その養父に亮はとんでもないいいこと言い放つ♡

「父さんがちんぽ挿れれば？もちろん夢子が良かったらだけど…」

「え、俺もいいの？」

「夢子が良かったらね」

夢子に倒れ込むようにのしかかっていた亮は体を起こして夢子を見た♡

夢子はごくりと喉を鳴らす♡

(お義父さんのちんぽ…そりゃさっきは欲しかったけどそれは亮がいなかったからで……、でも、私が良ければいいの?)

背中に当たる養父のちんぽは既に大きい♡
亮のちんぽに揺らされているときから大きくなっていたのは分かっていた♡

(ちんぽ、欲しい…♡もっと気持ちよくなりたい…♡)

「夢子ちゃん、俺も挿れていい?♡」
「いい、です…」

後ろから養父に頭を撫でられ夢子は素直に頷いてしまった♡♡

「夢子こっち♡」

亮に手を引かれるまま♡
夢子はソファに寝る亮の体の上に四つん這いの姿勢になって跨った♡
お尻を養父に突きだす♡もう恥ずかしさなど少しも無

く、期待しかなかった♡♡

「夢子ちゃんに挿れられるなんてなあ♡」

すぐに取り出したらしいちんぽの先を夢子の割れ目に塗りつける♡♡

実物は見えていないけれどそのちんぽは亮と同じか、それ以上だ♡

夢子を見て膨らんだちんぽ♡夢子の息もまた興奮で荒くなっていく♡

その夢子の頬を亮はキスを促すように撫でて、夢子もそれに従った♡

ちゅ、♡ちゅ♡

軽く唇同士が触れてからそれがゆっくりと重なって♡
ちんぽへの期待で動けなくなっている夢子の口内へ亮の舌が入ってきた頃♡♡

ず♡ちゅ…う♡♡

ちんぽがゆっくりと進んできた♡♡

「ん……ふ♡♡♡」

イったばかりのゆるんだナカを広げられる感覚に夢子は呻く♡

熱くて太いものが押し広げながらゆっくりと侵食するみたいに進んで♡

すぐに養父のお腹がお尻について夫以外のちんぽを完全に受け入れてしまったことを実感した♡♡

「夢子ちゃん、奥まで入っちゃったね♡♡」

嬉しそうに養父はそう言って、すぐ動いてくれると思ったのに♡

養父に差し出している夢子の腰を後ろから抱き締めその手は夢子のクリトリスへ回ってきた♡

片手で皮を広げ、それからもう片手の人差し指がゆっくりとその敏感になっている粒へ優しく触れる♡

「……ッ♡♡♡」

微かに触れたただけなのに夢子の腰がびくりと震えた♡
それからその指はクリトリスを愛でるように♡

くる…♡

先端を円を描くように撫で始めた♡

「…、っ♡」

くる♡くる♡

触れられているのか分からないほどの弱い力で♡

くる♡くる…♡

「んう♡ん♡」

養父の指先の固い皮膚が掠めていく♡

くる…♡くる♡くる♡

「…っ♡ん♡」

埋められているちんぽはまだ動いてはくれないようだ

♡

クリトリスの先端をチリチリとくすぐられ夢子の腰が
しなると♡

今度はその指が♡

くる…♡くる…♡

「ふッん♡♡」

クリトリスの幹を回る♡

くるくる…♡くる♡

先端から根元へゆっくりと回転しながら下りて♡上
がって♡

その細かな動きにクリトリスは根元が痛いほど勃起し
てじんじんする♡♡

くる♡くるくる♡くる…♡

ほんの少しの指先が滑るだけで強い刺激は与えられ
ない♡

夢子はもじもじと腰を動かすけれど養父はそれを制するように腰を抱いてクリトリスをいじり続ける♡

くる、くるくる…♡くる…♡

「ふっう♡ん、あ♡ん♡っ♡」

くるくる♡くる、くる♡

「ん、んう♡っ♡んっ♡あっ♡」

くる…くる♡くるくる…くる♡

「ん♡ッ♡んん～♡ッ♡♡」

(なんで動いてくれないの…♡♡ちんぽ埋まったままクリだけで焦らされるのきつい♡♡)

気付けば夢子は亮とキスしたまま、
無意識に腰を波打つように揺らしてしまっていた♡

(はやく…♡はやく欲しい♡お義父さん、はやく……♡♡♡)

早くちんぽに突かれたくて夢子の腰の動きは小刻みになっていく♡♡

全身が汗ばむほど必死に♡

「夢子えっろ…♡」

亮も本能ままに動く夢子に興奮して舌へ吸い付いて♡

「っあ♡ん♡ ツツ♡♡む、う♡♡んあ♡、あ♡♡♡」

夢子がだらしなく大きく口を開けたままその唇を受け入れると♡

ぐっ♡

急に腰を抱えていた養父の腕が自らへ引き寄せるように抱き締めてきて♡

それと同時に

ぐぼ…っっ！！♡♡

ちんぽは力いっぱい奥を押し潰し♡♡

ぎゅうっっ！！♡♡

クリトリスの幹を滑っていた指はその根元を強く挟み込んだ♡♡

「〜〜〜〜〜……………ツツツ！！♡♡♡」

中と外、両方にいきなり叩き込まれた刺激に夢子は声にならない悲鳴をあげて亮の体へ倒れた♡♡

倒れてもまだ体がビリビリと痺れるような感覚がする♡♡

ぐぼっ！♡♡ずるる！♡♡ぐぼっ！♡♡ずるる！♡♡

ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこっ♡♡

「あゝ…ツッ！♡♡♡あゝ ツは、あ♡♡あゝ ツ♡♡♡
あゝ ツあゝ っ♡♡♡」

「夢子ちゃんのクリ、すっかりちんぽみたいに勃起しちゃったね♡」

養父は余裕のある声でちんぽを抜き差ししながら♡
今まで弱い刺激しか与えていなかったクリトリスをいきなり強い力でしごき始めた♡♡

ぐぽっ！♡♡ずるる！♡♡ぐぽっ！♡♡ずるる！♡♡
ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこっ♡♡
「やっあゝ ツ♡♡♡あゝ っ♡♡あゝ ツ♡♡う、あゝ…ツ♡♡♡」

「クリちんぽ♡甘やかしたあとにこうやってしごかれるのたままないでしょ♡」

ぐぽっ！♡♡ずるる！♡♡ぐぽっ！♡♡ずるる！♡♡
ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこっ♡♡
本当にちんぽを射精促進するみたいに♡

きつく挟んで根元から先端へ乱暴に往復する♡♡
その間も養父の勃起ちんぽは夢子のおまんこへ押し込まれていた♡♡

「このまま一気にイっちゃおうね♡♡お義父さんのちんぽ受け入れる淫乱まんこいっぱい突かれて♡♡クリちんぽしごかれまくって…♡♡イっちゃおう♡♡」

ぐぽぐぽぐぽぐぽぐぽぐぽぐぽ…ツツツ！！♡♡♡
ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこ…ツツツ！！
！♡♡♡

「……ツツツ！！♡♡♡い”、やっ♡♡♡あ”、あ”
ツツ♡♡あ” ツあ～～ツツ♡♡♡すご、い♡♡♡これ、
すご…♡♡♡！」

おまんこをガン突きする養父の腰♡
愛液が飛び散るほどの勢いでしごかれるクリトリス♡
夢子は亮の胸に頬を押し付けたまま、ただ気持ちよくなりたくて自らも夢中で腰を振った♡♡

■続きは製品版にて♡